(息/BREATH)

2008(平成20)年2月26日鑑賞〈松竹試写室〉



監督・脚本=キム・ギドク/出演=張 霊ノチアノハ・ジョンウノカン・イニョン(Tスピ ーオー配給/2007年韓国映画/84分)

……キム・ギドク監督の第14作目は、台湾の名優張 震扮する死刑囚と不幸 な主婦との「面会」が物語の軸。面会室でプレゼントされるのは「四季」だ が、さてそれはどんな手段で……? 死刑囚のブレス、不幸な女のブレス、 そして面会室で重なり合う2人のブレス、それをあなたはどう感じるかがこ の映画のテーマ……? するとまたしても、あなたの「感性」が問われるこ と確実だが……。

===キム・ギドク×チャン・チェンの顔合わせが!

韓国の鬼才キム・ギドクの『絶対の愛』(06年)に続く第14作目は、何と台湾の大 スター張 震を起用した野心作! 中国の田 壮 壮監督の『呉清源 極みの棋 譜』(06年)では日本語をしゃべっていたから、チャン・チェンは韓国語もしゃべる の、と思ったら、大まちがい……?

チャン・チェン演ずるチャン・ジンはハンソン刑務所に収容されている死刑囚。そ して、死刑執行までの残りわずかな時間に、ある道具を使って自らノドを突き刺して 自殺をはかったため、一命はとりとめたものの、声を失ったという設定。なるほど、 そういう手があったか……?

『呉清源 極みの棋譜』での凛とした美しさが光っていたチャン・チェンが、『ブレ ス』ではセリフなしという難しい演技を要求されたわけだが、彼の才能をもってすれ ば、表情と動作だけの演技だってへっちゃら! 低予算、短期間製作主義のキム・ギ ドク監督は、チャン・チェンのシーンを10日間の韓国滞在中、4回の撮影ですべてこ なしたとのことだ。

天才同士の顔合わせだと、こんな風に何でもできてしまうもんだと大いに感心!

端なぜ 1 人の主婦が……?

キム・ギドク監督の天才たる由縁は、その独自の感性でオリジナルなストーリー (脚本)を次々と創り出すこと。この映画で熱演する主婦のヨン (チア)が死刑囚チャン・ジンと結びつく接点は本来何もない。なぜならヨンはモダンな家に住み、リッチな生活を夫と幼い一人娘と共に送っている、一見幸せそうな主婦なのだから。

ところが、リビングルームの壁にかけられた大型テレビで報道される死刑囚チャン・ジンの自殺未遂報道にヨンが興味を示したのは一体ナゼ……? それは、夫の浮気を知った彼女の心の中に大きなすきま風が吹き始めたためだ。そんな彼女の興味の対象は多分何でもよかったのだろうが、偶然テレビで観たそんな死刑囚の不幸に不思議な同情と共感を覚えたヨンは、その後、あっと驚く行動をとることに。

一何をしてあげられるの……?

死刑執行を待つ死刑囚への一般面会がどの程度容易なのか、困難なのかについての 韓国の法制度を私は全然知らないが、この映画を観ていると「え、こんなことまでで きるの? | と思うことがいっぱい。

それはともかく、面会受付所でチャンとの関係を聞かれたヨンは「昔の恋人」という名乗り方だったが、「それではダメ」と言われたのはむしろ当然。ところが、後述のようなある事情によって面会することができたヨンは、チャンに対して9歳の時に体験した不思議な5分間の臨死体験を告白。これによってそれまで全く面識のなかった2人の心が通うようになっていったから、人間って不思議なものだ。

この最初の面会を終えたヨンは、その後チャンに対して何をしてあげられるのかということをいろいろ考えたようだが、そこで思いついたのは、彼に四季をプレゼントすること。さて、そんな突拍子もない思いつきを、ヨンは一体どんな手段で、またどんな表現方法で……?

響妙に気になる、保安課長の視線

『春夏秋冬そして春』(03年)ではキム・ギドク監督自身が主演し、その精悍な肉体を披露したが、この映画では、ヨンが最初に面会にやってきた時から、その姿を執拗

62 加害者と被害者の視点から贖罪について問う

30

に映し出す監視カ メラが妙に気にな る……。前述のよ うに、「昔の恋人 でした というだ けの説明では面会 はムリだと言われ、 戸惑っているヨン を映し出す映像を 観ながら、「まあ いいだろう | とい う判断を下した (?) のは保安課 長。彼から受付係 への電話によって、 ヨンはチャンと面 会できるようにな ったわけだ。

議な同情を覚えたのは一

わるの?

す吐息はチャンにどう伝

で春の曲を歌い踊るヨン の姿にまずビックリ。夫

そんな交流の中チャンの

しかして、生と性をこ

一色の壁紙を張り、春服

の臨死体験を告白したヨ

は春夏秋冬。面会室に春

自身の幼い時

ヨンがチャンに贈るの

の妨害を排除しそれが夏

執念だが、実はそれは死 心に芽生えたのが生への

人に待つものは? こまで燃焼し尽くした

その1回目の小 さな穴の開いたガ ラス窓を隔てた2 人の面会も、係員 が同席しているば かりではなく、 す べて監視カメラが その様子をとらえ

息とは? りもない主婦。夫の浮気 チャンとの 面会に赴くのは縁もゆか を繰り返す た、監房の中で息づく吐 日だけの撮影で表現し 欲作にはそんな主張が明 と脚本が勝負! この意 が多い昨今、映画は企画 させた。原作頼みの映画 セリフゼロ、韓国滞在十 珠玉、チャン・チェンが、 オール海外資本、低予算、 才監督キム・ギドクが、 に苦しむヨンが彼に不思 **短期間で十四作目を完成** 死刑囚に扮した台湾の 自殺行為 そう宣言した韓国の天 韓国では公開しない! 吐息に見る極限 ンが、仕切り越しに交わ



ブレス

うからシネマート心斎橋で公開

©2007 KIM Ki-duk Film.All rights

秋冬と続いていく展開は 異様だが、ヨンは真剣。

史上に残る名シーンだ。 極限の愛の世界は、映画 に生まれる 交差した時 ンの吐息が

だったチャンの吐息とヨ 圧巻! 生ける 屍 状態 質がくっきりと! 間の、そして男と女の本 ける性的欲望の激しさは **愛者の求愛を拒否し続け** 公開! 同室の若い同性 室の中でのそれは本邦初 まま、看守が見守る面会 ーンは数多いが、手錠の ク自身? その目には人 観察する保安課長はギド な二人をモニター越しに の恐怖の裏返し! たチャンが、ヨンにぶつ 映画が描くセックスシ

2008(平成20)年5月31日 大阪日日新聞

3回目と続く、手錠をかけられた状態ながら、2人を分け隔 ていた。さらに2回目、 てるものがない部屋の中での面会の様子をすべて監視カメラによるモニターで見てい たのがこの保安課長のようだ。 もっとも、 この保安課長はスクリーン上には一切登場 せず、モニターをチェックしている人間が何となくガラスに映っているような雰囲気 がするだけ。もちろん登場人物として名前が表示されているわけでもないが、この監視カメラで常に映像をチェックしている保安課長はひょっとして……?

一面会でここまで可能なの……?

死刑囚の男と、毎週その面会にやってくる自殺志願の女という奇妙な主人公による感動作が、ソン・ヘソン監督の『私たちの幸せな時間』(06年)だった。ラストに「この映画は現実の韓国の法制度に正確にマッチするものではありません」という字幕が表示されていたが、死刑囚との面会が、手錠がつけられておりまた係員立会いの下ではあるものの、かなり自由であることに、弁護士の私はかなり大きな違和感を覚えたものだった(『シネマルーム13』99頁参照)。

そんな面会における「自由度」は、チャンとヨンとの面会シーンをストーリー構成のメインに据えた『ブレス』も、『私たちの幸せな時間』と全く同じ。そして、キム・ギドク監督はそれを前提としてその自由度をさらにエスカレートさせ、四季のプレゼントの仕方を工夫している。最初のテーマは「春」だが、面会室に入ってきたチャンがビックリしたのは当然。だって、そこには壁一面が春の花に飾られた美しい風景の中に、春らしいワンピースを着たヨンが立っており、しかもラジカセから流れてくる春らしい曲に合わせて彼女が歌い踊っていたのだから。韓国ではホントにこんなことが可能なの……?

そう思っていると、「夏」には2人はキスを交わすようになり、「秋」にはそれが一層エスカレート。そして「冬」になると、何と2人は服をはがし合い、互いの肉体をむさぼり合うまでに……。いくら何でもこれはありえないはずだが、ひょっとしてキム・ギドク監督扮する保安課長の許可があればオーケー……?

ぶあなたの感じ方は……?

はじめて『ブレス』というタイトルを見た時は一体何の映画かサッパリわからなかったが、映画を観ていると、原題、邦題、英題とも何とピッタリのタイトルだろうと、感心するはず。

映画の冒頭、4人部屋の中にいるチャンが吐くブレスは何とも重々しいもの。そのうえ若い囚人(カン・イニョン)との濃密な関係が示唆されるから、その展開も楽しみ……? 他方、浮気がバレても全く反省の色のない夫に対して絶望的な気持になっ

64 加害者と被害者の視点から贖罪について問う

ているヨンの叶くブレスもかなり切ないもの。そんな縁もゆかりもない2人がはじめ て面会した時、声を诵すためにガラスに数カ所開けられている細かい穴を诵して2人 のブレスがどのように交わっていくのだろうか……?

そんなところに目をつけるから、キム・ギドク監督の才能はすごい。ギリギリまで ガラスに顔を近づけることを要請したチャンが抜きとったヨンの1本の髪の毛の価値 は……? また別れ際、チャンがガラスに押しつけた唇に込めた想いは……? さあ、 そんなこんなのブレスをあなたはどのように感じる……?

■ 星5つがまた追加

私がキム・ギドク作品をはじめて観たのは『春夏秋冬そして春』だが、その感激を 受けて当然のように星5つをつけた(『シネマルーム6』68百参昭)。その後観たキ ム・ギドク作品は、『サマリア』(04年)(『シネマルーム7』396頁参照)、『受取人不 明 (Address Unknown)』 (01年) (『シネマルーム 8』77頁参照)、『うつせみ (空き家 / Bin-Jip)』(04年)(『シネマルーム10』318頁参照)、『弓』(05年)(『シネマルーム 12』325頁参照)、『絶対の愛』(06年)(『シネマルーム13』86頁参照)の順だが、これ らはすべて当然のように星5つの連続。そして、この『ブレス』で星5つ作品がまた 追加されることに。

私はそれが当然と思っているが、もし異論のある方は是非どうぞ……。

2008(平成20)年2月27日記